The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日英経済用語を描写する形容詞のメタファー比較
Author(s)	Miles, Neale
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 67-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62020
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日英経済用語を描写する形容詞のメタファー比較

NEALE, MILES

要旨

本研究は日本語の経済論文に使用されるメタファーを概念メタファー論の見地から分析し、英語の経済メタファーとの共通点と相違点を指摘する。具体的に、経済論文のコーパスを活用して経済用語の前で使用される形容詞に着目し、その形容詞で形成されるメタファー的な表現の概念領域を分析する。この分析を通して、先行分析で指摘されていない＜経済は自然である＞という概念メタファーの存在を提言し、日本語と英語の形容詞の中で文化背景を示す特徴的なものがあることを明確にする。

1. 序論

企業や政府機関では、経済に関わる研究が重要視されており、企業や政府機関の責任者はこの研究に基づいて投資や経営方針、影響方針、従業員の給料や労働状況等について判断している。経済研究の中の主要概念の表し方が以上の判断に影響を及ぼすため、経済概念の表し方が極めて重要であろう。

そこで現れる疑問は、異なる言語で経済の表し方が変わるかどうかという点である。経済学の分野では、経済概念は普遍的なものだと広く理解されている（Henderson, 2000; 長尾2002）が、ある言語には独特な慣用句やメタファーが存在するため、経済概念を表す際に使用される慣用句やメタファーが言語によって異なることが想定できる。

本稿では、英語と日本語の経済研究に現れる経済用語の表し方をメタファー論の見地から分析し、経済用語を描写するメタファーや慣用句の共通点と相違点を指摘する。そうすることで、日本と英語圏では「経済」という概念がどのような比喩基盤に置かれており、どのような起点概念を通して理解されているかを明確に示す。

2. 先行研究

英語の経済メタファーはすでに多くの経済学者と言語学者によって分析されている。Charteris-Black (2004:136)は、経済学においてメタファーの重要性を最初に指摘したのはMarshall (1890:454)であると述べている。Marshall (1890:454)はAdam Smith が経済を描写する際、「生物」のアナロジーを頻繁に使用したことを指摘した。例えば、Smith (1776:604-5[長尾2002:107　引用])は英国を「不健康な人体である」と描写し、英米の貿易路線を「人為的に膨張させられている大血管」に、通貨の循環を「血液の循環」に喩えた。また、当時の産業革命の影響を受け、通貨の循環を「蒸気機関車の動き」にも喩えた。Smithの影響を受け、経済学の初期から「生物」と「機械」のメタファーが一般的に使用された。

Smithの時代から現代まで技術や産業が大きく進歩し、それとともに経済の描写に使用されるメタファーも多様化してきた。Alejo (2010:1140)は現代の経済研究に共通している四つの根源的なメタファー（Werth [1994]はこれらを「メガメタファー」と呼んだ）があると指摘し、以下の表でまとめた。その4つはSmithが使用した「THE ECONOMY IS A MACHINE（経済は機械）」と「THE ECONOMY IS A LIVING ORGANISM（経済は生物）」に加え、「BUSINESS/TRADE IS WAR（取引・通商は戦争）」と「BUSINESS IS A JOURNEY（取引は旅）」というメタファーである。

表1　経済研究の文章に使用されるメタファー（Alejo 2010, p. 1140）

概念メタファー	指摘した文献	例
THE ECONOMY IS A MACHINE（経済は機械）	Boers (2000); Resche (2002); Skorczynska and Deignan (2006); Boers and Demecheleer (1997); White (2003)	fine-tuning the economy, macroeconomic tools, economic levers, market mechanisms等
THE ECONOMY IS A LIVING	Charteris-Black (2000); Resche	economic growth, healthy

ORGANISM（経済は生き物）	(2002); Boers and Demecheleer (1997); Boers (2000b); López Maestre (2000); White (2003)	economy, infant industry, parent company, chances of survival等
BUSINESS/TRADE IS WAR（取引・通商は戦争）	Boers and Demecheleer (1997); Boers (2000); López Maestre (2000); Charteris-Black and Ennis (2001); Eubanks (1999)	economic arm wrestle, fight for market share, combat fraud, invade markets, trade war等
BUSINESS IS A JOURNEY（取引は旅）	Boers and Demecheleer (1997); López Maestre (2000); Eubanks (1999)	economy has shifted, economic fast track, leading companies, free rider, fast movers等

また、Alejoは「容器」のイメージ・スキーマが英語の経済文章における中心的な概念であると指摘し、「市場」や「経済」、「国家」等が容器のように扱われていると論じた。さらに、Charteris-Black (2004:142)は「ECONOMIC PROBLEMS ARE NATURAL DISASTERS（経済問題は自然災害である）」と「MARKET CHANGES ARE PHYSICAL MOVEMENTS（市場の変化は物理的な動き）である」も根源的なメタファーであると論じた。「MARKET CHANGES ARE PHYSICAL MOVEMENTS」はAlejoが提案した「BUSINESS IS A JOURNEY」の下位メタファーとして分類できるが、「ECONOMIC PROBLEMS ARE NATURAL DISASTERS（経済問題は自然災害である）」はAlejo のメタファーの枠に属せず、「THE ECONOMY IS NATURE（経済は自然である）」の下位メタファーに属する下位メタファーだと想定できるが、コーパスでこのメタファーの存在を実証する必要がある。

Charteris-BlackはBank of Englishの中の経済雑誌「The Economist」のコーパスを使用し、この雑誌には＜災害＞や＜動き＞の概念領域に属する単語の使用頻度が幅広い文章をまとめるBank of Englishのコーパス全体における使用頻度より高いことを示した。この結果から、「MARKET CHANGES ARE PHYSICAL MOVEMENTS」と「ECONOMIC PROBLEMS ARE NATURAL DISASTERS」が経済の特徴的なメタファーであることが分かる。このように経済メタファーの使用頻度が確認できるため、コーパス分析が有意義な分析方法だといえよう。しかし、Charteris-Blackは恣意的にキーワードを選んでデータを収集したため、彼の分析はAlejoに指摘されたメタファーの一部のみ扱っていると考えられる。この問題を防ぐためにキーワードを定量的な方法で選択し、参考文献で指摘されているメタファーを意識して分析を行うことが重要であるといえよう。

日本語の研究に関しては、山本（1984）と長尾（2002）は経済概念のメタファーを分析しているが、これらは英語の経済メタファーと日本語の経済メタファーを同一のものとして扱っているため、日本語の特有のメタファーに触れていない。日本語の特有の経済メタファーを認知言語学の見地から分析した研究は少ないため、この分野の研究を拡大させることに意義がある。

日本語と英語には経済概念を修飾する独自の表現が使用されていることが確かである。その例としては、日本語では「（物価が）うなぎ登りで上がった」という日本の食文化と自然界から影響を受けた独自の慣用句があり、同じく英語では「（Prices were） in the doldrums」という英国人と米国人の探検家が経験した太平洋、大西洋の赤道の熱帯無風帯の環境を物価の状態に喩える独自の慣用句がある。このように、経済用語の前後に使用されるメタファー的な表現や慣用句は言語の文化背景を表している。こうしたメタファーの相違点と共通点を分析することは本稿の目的である。

3. 分析方法

分析方法としては、コーパス言語学の手法を参考に、経済学に関する英語と日本語の論文を収集し、英語論文と日本語論文の小規模のコーパスを作成した。コーパスの対象とした経済研究は、経済研究所がインターネットで公開している論文（白書と研究レポート、ディスカッションペーパー）である。経済を専門とする研究所の論文は経済に詳しい読者のために書かれているため、経済専門用語が多用されていると想定した。また、研究所の論文の書き方は一般の経済教科書より制限が少なく、慣用句が多く使用されているため、慣用句やメタファーの研究に適切だと考える。

コーパスの対象の論文を公開した経済研究所に関しては、影響力の高さと公開している論文の

質に基づいて英語圏と日本の研究所をそれぞれ10か所選択した。選択した経済研究所は以下の通りである。

表2　研究対象の論文を公開している経済研究所

英語圏研究所	日本の研究所
American Institute for Economic Research (AIER)	一般財団法人　アジア太平洋研究所（APIR）
London School of Economics and Political Science Centre for Economic Performance (CEP)	一般財団法人　日本経済研究所（JERI）
Centre for Economic Policy Research (CEPR)	大阪大学社会経済研究所（ISER）
CESifo Group Munich	株式会社日本総合研究所（JRI）経済部門
Centre for Macroeconomics (CFM)	株式会社丸紅経済研究所
Institute of Economic Affairs (IEA)	公益財団法人　東京経済研究センター（TCER）
International Monetary Fund (IMF)	独立行政法人　経済産業研究所（REITI）
National Bureau of Economic Research (NBER)	内閣府経済社会総合研究所（ESRI）
Suntory and Toyota International Centres for Economics and Related Disciplines (STICERD)	ニッセイ基礎研究所（NLI）経済部門
World Bank Development Economics Group (DEC)	一橋大学経済研究所（IER）

以上の研究所から、調査が行われた時点[1]で最も最新に公開された物から、公開日付順で論文のサンプルを10件収集した。完成したコーパスのサンプル数はそれぞれ100件、日本語論文コーパスのタイプ数が32,058で、トーケン数が1,087,505であり、英語論文コーパスのタイプ数が59,257で、トーケン数が1,870,416である。トーケン数100万以上はある特定の文章のジャンルを表すことに適切な大きさであると先行分析で指摘されている（Reppen, 2010: 32）。また、全ての論文を読んで言葉遣いを詳しく分析し、コーパスの量的分析の結果を確認することが可能であるため、サンプル数が本研究に適切であるといえよう。

検索方法に関しては、検索方法に関しては、Deignan (2005)で使用されているコーパス分析方法を参照に、経済論文コーパスから経済用語を品詞別で抽出し、コンコーダンス検索でその用語の前後で使用される表現を分析した。そして、抽出した表現がメタファー的であるかどうかについて判断し、メタファー的な表現を集計した。その後、メタファー的な表現を分野別に分類し、英語と日本語の経済用語を表すメタファーの概念要素を比較した。

経済用語の前後で使用されるメタファーを抽出するために、Omori (2012)と同様の方法で経済用語の前後4語以内で使用される語を品詞別で見て、「形容詞」＋「名詞」（ADJ+N）のパターンで現れるメタファー表現を集計し、該当する概念領域に切り分けた。例えば、「economy」を表すメタファーを調べるために、英語論文コーパスで「economy」を検索し、前後で「economy」を修飾する形容詞と一緒に使用される動詞を調査し、メタファー的な表現（例えば**black** economy, **open** economy, **growing** economy等）を集計し、「THE ECONOMY IS A MACHINE」、「THE ECONOMY IS A LIVING ORGANISM」など、参考文献に指摘されている概念メタファーに切り分け、これらに該当しない表現の概念メタファーを提案する。その後、「economy」に当てはまる日本語である「経済」で同じプロセスを行い、結果を比較する。

研究対象として使用した言葉はそれぞれのコーパスで使用頻度が高かった言葉である。経済単語の全体的な使用傾向を調べるために最初に最も高頻度で使用された名詞を20語抽出し、高頻度であった理由を考慮した。

今回、「名詞＋形容詞」のパターンを分析するために、高頻度リストの中から両方の言語で頻度の高かった単語を4語選択し、相手言語に訳し、合計8語（単語＋訳語4組）を研究対象にした。それぞれの単語のコンコーダンスを検索し、単語と訳語の前で使用された形容詞を分析し、メタファーを比較した。

4. 分析結果

4.1. 名詞の使用頻度

[1] 2017年3月

最初に頻度が最も高かった名詞に着目する。それぞれのコーパスの頻度上位20語の名詞が以下の通りである。

表3　名詞の頻度順位

頻度順位	英語経済用語（名詞）	頻度	割合	日本語経済用語（名詞）	頻度	割合
1	growth	5943	0.32%	企業	3018	0.28%
2	policy	4766	0.25%	円	3006	0.28%
3	market	3645	0.19%	経済	2450	0.23%
4	economies	3323	0.18%	結婚	2198	0.20%
5	bank	3123	0.17%	日本	2102	0.19%
6	investment	3065	0.16%	生産	2087	0.19%
7	rate	3054	0.16%	調査	1907	0.18%
8	rates	3037	0.16%	労働	1623	0.15%
9	prices	2797	0.15%	率	1621	0.15%
10	world	2704	0.14%	産業	1567	0.14%
11	inflation	2685	0.14%	研究	1564	0.14%
12	interest	2300	0.12%	影響	1494	0.14%
13	capital	2264	0.12%	結果	1492	0.14%
14	markets	2130	0.11%	投資	1414	0.13%
15	data	2091	0.11%	分析	1374	0.13%
16	banks	2028	0.11%	事業	1270	0.12%
17	debt	1997	0.11%	雇用	1258	0.12%
18	gdp	1901	0.10%	地域	1192	0.11%
19	risk	1900	0.10%	消費	1113	0.10%
20	crisis	1831	0.10%	女性	1107	0.10%

注：本研究の分析対象ではない数字と多数の熟語で使用される言葉（性、的、者など）は高頻度リストから省いている。

以上の表から、英語圏の経済研究所と日本の経済研究所の論文の注目が共通点と相違点があることが分かる。共通点としては、両方のコーパスには「経済」と「投資」「率」を意味する言葉の頻度が高かった。一方、相違点としては、英語コーパスでは「world」の頻度順位が10位であったが、日本語コーパスでは「日本」や「円」が「世界」より順位が高かった。この結果から、日本の研究所は英語圏の研究所より日本の経済に関心があり、IMFやWorld Bank DECを始め、英語圏の経済研究所は世界規模で経済を分析することが多い。また、「結婚」と「女性」は日本語の頻度上位リストに入っていて英語リストに入っていない。これから、日本の研究所は特に女性就職率の問題や結婚と労働の関係に注目している可能性があるといえよう。しかし、無作為に選ばれたサンプル論文の内容が以上の使用頻度の統計に大きな影響を与えており、サンプル数や調査の時期、研究所の選択によって単語の使用頻度が異なる可能性が高い。そのため、以上の結果を深く分析せず、あくまでも経済メタファーのパターン分析の出発点として使用する。

次に、上の単語頻度の統計を踏まえて、以下の英語と日本語の名詞ペアの前後で使用されてい

るメタファーを分析する。

表4　研究対象の単語ペア

ペア番号	英語コーパス上位単語	和訳
①	growth	成長
②	policy	政策
	日本語コーパス上位単語	英訳
③	企業	firm
④	経済	economy

以上のように、豊富なメタファーの種類を求めて、それぞれの言語で可能な限り最も頻度の高い単語を選択した。しかし、英語のコーパスで「yen」の使用例が少なかったため、日本語コーパスで頻度が2位であった円を選択せず、その代わりに3位であり英訳の使用頻度も高かった「経済」を選択した。

以下は上記のペアのコンコーダンス検索の結果を提示し、前後に使用された形容詞を概念メタファー論の見地から分析する。

4.2. 単語ペア①　「growth」と「成長」

「growth」と「成長」の前に使用された形容詞の中で、メタファー的な物が多かった。Alejo (2010)のまとめから分かるように、多くの先行研究では「economic growth」は＜経済は生き物である＞という概念メタファーの例として挙げられている。しかし、コンコーダンス検索から、日本語と英語の経済論文において、「growth」と「成長」は必ずしも「生き物の成長」として描写されているとは限らないことが分かった。それぞれの語の前で使用されたメタファー的な形容詞を詳しく見てみよう。

表5（付録）はコーパスで「growth」と「成長」の前で使用されたメタファー的な形容詞を示している。表には形容詞のメタファーの起点概念領域と、具体的な概念要素を載せている。起点概念領域と概念要素に関しては、辞書（大辞林とOxford English Dictionary）の定義を参考に決めた。例としては、「**strong** growth」という表現があった場合、辞書定義を読んで「strong」が一般的に＜物＞と＜生き物＞を指すことを確認し、その2つの概念領域を図表に記入した。また、「strong」は物と生き物の「強さ」を描写するため、「強さ」を概念要素にした。結果を見ると、＜生き物＞の領域に当てはまる形容詞（英語では「weak」、「strong」、「anemic」、「organic」など、日本語では「健全な」､「力強い」）が両方の言語で使用されたが､それ以外に＜旅＞（例えば「export-led」や「堅調」）や＜移動＞（「rapid」や「緩やか」など）の領域に当てはまる単語も多く使用された。その理由としては、経済指標の成長が折れ線グラフで表されることが多く、指標の成長がその折れ線の動きに喩えられることが多いと想定できる。同じ理由で「高い」や「flat」、「sharp」など、＜物＞の「形」や「位置」を描写する形容詞も多用された。なお、結果の中で＜物＞を描写する形容詞も際立っており、これらの多くは＜生き物＞に対して使用できる単語ではあるが、「sustainable」や「底堅い」など、主に生き物ではなく物に対して使用される形容詞も多かったことが分かった。

「成長」を描写する＜生き物＞以外の領域に属する形容詞は二つの起点領域を混合させており、Fauconnier and Turner (2002)のブレンド理論（blending theory）で提唱されている「ブレンドスペース」（blended space）の例だと考えられる。例えば、「export-driven growth」では「旅」と「生き物の成長」といった二つの「入力スペース」（input spaces）からの要素が「経済指標の変化」（いわゆる出力スース [output space]）に写像され、混合されている。このようなブレンドは両方の言語の形容詞に見られる。

日本語と英語の形容詞のメタファーを比較すると、大きな差がなかったが、それぞれの言語に特徴的なメタファーがあった。例えば英語では、液体の温度を表す「tepid」（生ぬるい）と色や

太陽の明るさを表す「bright」（明るい）が描写に使用された。これらは自然界と関連のある表現であり、＜経済成長は植物の成長である＞といった概念メタファーの影響を受けて生み出されたメタファーと考えられる。先行分析には経済との自然やへの写像

日本語では「底堅い」、「着実」、「堅調」など、成長の安定さに着目する形容詞の種類が英語より豊富であった。全体的に英語の形容詞の種類が日本語の種類より多かったが、これは「成長」の使用頻度が「growth」より比較的に低かったことと、英語で形容詞として使用されている単語が日本語で名詞になる傾向がある（例えば、「economic growth」では「economic」が形容詞として扱われるが、日本語では「経済成長」の「経済」が名詞として扱われる）ことによるといえよう。

なお、名詞の前に使用された形容詞を分析する際に注意すべきところは、形容詞は隣の名詞ではなく、その次に来る単語や名詞句全体を描写することがある。例えば、「戦略的」は以下の文脈で使用された：

> 「そもそも産業構造全体が小規模であれば、**戦略的な成長**産業に関する官僚の選択が間違いである可能性も少ない。」[2]

ここでは、「戦略的」は厳密に「成長」ではなく「成長戦略」という名詞句を修飾している。上記の「成長」のように、注目されている名詞が名詞句の意味に貢献しているため、本研究では名詞句を修飾する形容詞も分析対象として扱っている。しかし、これらの形容詞の役割を分析するために、注目されている単語の名詞句も分析する必要がある。

4.3. 単語ペア②　「policy」と「政策」

次に「policy」と「政策」の前で使用されるメタファー的形容詞を分析する。

表６（付録）はコンコーダンス検索で抽出したメタファー的な形容詞を示している。この結果から、両方の言語で「政策」が＜生き物＞（特に人間と動物）として描写されることが多いことが分かった。＜動物＞と＜人間＞の概念領域に分類した形容詞はメトニミー的な役割を果たしているといえよう。政策を作る人間の特質が、これらの形容詞を通して政策に写像されている。例えば、「far-reaching policy」では（メタファー的に）手を伸ばして遠く離れているところまで影響を及んでいる為政者の特質が政策にマッピングされている。また、日本語の「合理的な政策」では合理的な為政者の特質がその人が作った政策にマッピングされている。これらのメトニミーを「POLICY STANDS FOR POLICYMAKERS」として定義することができる。また、これらは擬人化の例でもある。

＜動物＞と＜人間＞のほかに＜物＞として描写されることが多かった。具体的に＜容器＞の領域に当てはまる形容詞（**open** policyや**exogenous** policy[3]）と＜建造物＞に当てはまる形容詞（**accommodating** policy、**建設的**な政策）が際立った。これから、Alejo (2010)が指摘した＜容器＞スキーマが政策に対しても使用されていることが分かる。

日本語と英語の形容詞を比較すると、特に英語の「policy」を修飾するメタファー的な形容詞の種類が豊富であることが分かる。これは上に指摘した日本語の名詞使用傾向と、「policy」の使用頻度の高さによるといえよう。しかし、それぞれの言語には特徴的な形容詞があった。例えば、英語では＜音楽＞の領域に当てはまる「harmonized」と＜自然＞の領域に当てはまる「erode」と「natural」という形容詞が特徴的だった。また、「three-pronged」（三つ又）はローマ神話や西洋の農業を連想させる特徴的な形容詞であった。一方、日本語では＜移動＞領域に当てはまる形容詞（「緩やか」や「円滑」）が多用された。これらは「政策執行」などの名詞句で使用されることが多く、政策自体ではなくその執行などを描写しているといえよう。また、「手厚い」という慣用句的な表現は英語にないメトニミー（上に指摘した「POLICY STANDS FOR POLICYMAKERS」）とメタファー（「親切で徹底的な行為は厚い手である」）のブレンドであり、日本文化において「手」の独特な位置づけを示している。

---

[2] 常木淳，『日本の官僚制とその評価―回顧と展望』，大阪大学社会経済研究所，２０１１年より。
[3] コーパス検索で「開放的政策」や「外生的政策」の例が見つからなかったが、インターネット検索で両方の表現の例が出た。

英語と日本語では「保護主義的な」の頻度が高かった理由の一つとしては、近年の経済研究所の論文では、英国のEU離脱や米国のトランプ大統領の保護主義的な貿易政策が注目されていることだといえよう。

4.4. 単語ペア③　「firm」と「企業」

続けて「firm」と「企業」の検索結果を分析しよう（表7参照）。日本語コーパスでは「企業」の使用頻度が最も高いだけに、修飾する形容詞のメタファーの種類が豊富であった。一方、英語では「企業」を意味する単語が「firm」に限らず、「company」や「enterprise」[4]などもあるため、コーパス全体において「firm」の使用割合が「企業」より少なかった。しかし、「firm」に付く形容詞の中でもメタファー的な物が多い。また、「firm」と「企業」を修飾する形容詞は、異なる文化的な特徴を明確に示している。

「firm」と「企業」を描写する形容詞の中で、＜生き物＞、＜動物＞の領域に属するものが最も多かった。英語では「active」や「young」、日本語では「活発」や「消極的」などの形容詞を通して、企業が「人」として描写され、企業の従業員の特徴が企業全体の描写に使用される。従って、このような形容詞は、「FIRM STANDS FOR FIRM EMPLOYEES」というメトニミーの例であるといえよう。

また、概念領域の中で＜移動＞と＜旅＞が際立っている。この領域に属する形容詞の例は「faltering」、「堅調」や「好調」などである。この形容詞は＜企業は人である＞というメタファーに基づき、その「人」（企業）が目標へ向けて行う行動を「旅」に喩えている。また、「leading」などは企業の競争をレースに喩え、ビジネス上の成功・失敗をレースの勝利・敗北に喩える。「leading」の他に「dominant」、「rival」、「competitive」など、＜競争＞関連の形容詞が特に英語コーパスに多用されたが、日本語では「企業の競争力」や「ライバル企業」など、名詞を使用する同様の表現があった。

さらに、企業を＜物＞として描写する形容詞も多く使用され、これらは企業の特徴を「形」（例えば「large」や「広範」）や「成分」（例えば「heterogeneous」[異質の]）として描写する。

英語コーパスにあった特徴的な形容詞は「leveraged」である。OEDによると、「leveraged」は「*the buy-out of a company by its management with the help of outside capital*」（"'leverage, v." *OED Online*, 2017）（経営者による他人資本を利用した企業の買収）を意味し、その「他人資本」を＜機械＞の「てこ」に喩える。これは＜経済は機械である＞の例である。日本語では「レバレッジ効果」と呼ばれる。

一方、日本語の特徴的な「企業」の描写は主に名詞によるものであった。その名詞の例として、「大手」と「傘下」、「川下」が挙げられる。「大手」と「傘下」は＜企業は人間である＞の延長であり、「大手」規模の大きい企業を「手の大きい人間」に喩える、日本語の特徴的な「手」のメタファーである。また、「傘下」は企業を「傘を持つ人」に喩え、その企業に属して支配を受ける状態を「傘の下にいる状態」に喩える単語である。それに対して「川下」は＜自然＞の領域に当てはまり、生産から販売までの過程を川の流れに喩え、最後の段階（販売など）を行う企業を「川下」に位置する単語である。英語でも「the flow of business」など、ビジネスの流れを液体の流れに喩えるメタファーがあるが、その過程を「川」喩える英単語がない。

4.5. 単語ペア④　「economy」と「経済」

最後に「economy」と「経済」を修飾する形容詞のメタファーを分析しよう（表8参照）。

表8を見ると、「economy」と「経済」を修飾する形容詞の起点概念領域はAlejoがまとめた4つの起点概念領域（＜機械＞、＜生き物＞、＜戦争＞、＜旅＞）とほぼ一致している。＜生き物＞の枠に「developing」や「unhealthy」、「従属的」、「内向き」などが入り、＜戦争＞の枠に「beleaguered」が入り、＜旅＞の枠に「market-oriented」、「堅調」などが入る。また、＜物＞の概念領域に当てはまる形容詞の多くは＜機械＞の領域にも入るといえよう。その例としては「overstretched」や「連関的」が挙げられる。なぜなら「overstretched」は機械が材料を伸ばしすぎる状態を、「連関的」はつながっている機械の構成を表すことができるからである。しかし、＜物＞の領域に入る形容

[4] これらの単語の意味に僅差があるが、多くの場合はいずれも「企業」の意味で使用することができる。本研究では、多くの経済論文で使用されているため、「firm」を研究対象にした。

詞の中で、＜機械＞に当てはまらない形容詞もある。例えば、「real」と「バーチャル」は物の「性質」を示す形容詞であり、＜機械＞と直接的な関係がない。

日本語と英語の結果を比較すると、多用されている形容詞の起点概念領域にほとんど差がないことが分かる。両方の言語で＜物＞と＜生き物＞の領域に入る形容詞が最も多かった。しかし、英語の形容詞の中で＜戦争＞の領域に当てはまる形容詞が一件あったが、日本語コーパスでは「経済」を修飾した言葉の中で＜戦争＞に関連のある言葉がなかった。つまり、「beleaguered」は英語の特徴的な単語であったといえよう。また、日本語では「自給自足的」という四字熟語由来の形容詞が経済の描写に使用された。「自給自足的な経済」という表現は経済を人として描写し、その「人」の生活を描写する。「自給自足」は1919年の『改正増補新しい言葉の字引』に含められた英語「self-sufficiency」の訳語である（大辞林　1995）が、英語コーパスには「self-sufficient」が経済の形容詞として使用されなかったことから、「自給自足的」は日本語の特徴的な形容詞であるといえよう。さらに「経済」の修飾に使用された名詞を見ると、日本語では「バブル」が特徴的であることが分かる。これは、日本の「バブル経済」が日本の経済論文に特に注目されていることの証拠であろう[5]。

5. まとめ

本研究は日英経済論文コーパスのコロケーション検索を通して、高頻度の経済用語と訳語のペア（「growth・成長」、「policy・政策」、「企業・firm」、「経済・economy」）を修飾する形容詞のメタファーを分析し、メタファー的な表現の起点概念領域と概念要素を指摘した。この研究を通して、Alejo (2010)に指摘された4つの経済概念メタファーと「容器」のイメージスキーマが以上の経済用語を修飾する形容詞に見られることが確認できた。また、「tepid growth」や「川下企業」などの表現に＜自然＞の起点概念領域を観察した。これに基づいて、＜経済は自然である＞という概念メタファーが提言できる。さらに、先行研究では「成長」と「growth」が＜経済は生き物である＞の例として扱われているが、コーパス検索の結果から「成長」と「growth」を修飾する形容詞の一部（「tepid」、「explosive」、「底堅い」など）は＜生き物＞の領域に当てはまらず、概念領域のブレンドの例だと指摘した。

概念領域の面では、日本語と英語の形容詞に同様の傾向を観察した。しかし、「**three-pronged** policy」や「**大手**企業」など、それぞれの文化の特徴的な概念要素を含める表現も観察した。これらの表現は、それぞれの文化において経済概念の描写に特徴的な側面があり、経済概念の認識にも相違点があることを示唆している。しかし、この仮説を証明するために更なる分析が必要であろう。

今後、日本語と英語の経済概念の描写の共通点と相違点をさらに明確にするために、経済論文コーパスを活用して経済用語の前後で使用される他の形容詞、そして動詞と名詞にも着目したい。また、それぞれのコーパスの特徴的なn-gramを分析し、定性分析を通して経済論文に使用される慣用句を分析したい。そうすることで、今まで英語と同一扱いをされた日本語の経済メタファーの特徴を明確にし、認知メタファー論研究において日本語と英語の経済メタファーの理解を深めたい。

参考文献

Alejo, Rafael (2010), “Where does the money go? An analysis of the container metaphor in economics: The market and the economy”, *Journal of pragmatics* 42, Amsterdam: Elsevier, 1137-1150.

Charteris-Black, Jonathan (2004), *Corpus approaches to critical metaphor analysis*, New York: Palgrave Macmillan.

Fauconnier, Gilles and Turner, Mark (2002), *The way we think: Conceptual blending and the mind’s hidden complexities*, Basic Books.

Henderson, Willie (2000), “Metaphor, economics and ESP: Some comments, *English for specific purposes* 19, 167-173.

Marshall, Alfred (1890/8th ed. 1920), *Principles of economics*, London: Macmillan and Co.

[5] 英語でも「bubble economy」は日本などの資産の価格高騰を表すように使用されているが、英語コーパスでは「bubble economy」が使用されなかった。

McCloskey, Deirdre N. (1985), *The rhetoric of economics.* Wisconsin: University of Wisconsin Press.
OED Online. Oxford University Press, March 2017. Web.
Omori, Ayako (2012), "Conventional metaphor for antonymous emotion concepts", in Wilson, Paul A. (ed.), *Dynamicity in emotion concepts,* Frankfurt: Peter Lang.
Reppen, Randi (2010), "Building a corpus: What are the key considerations?", in O'Keefe, Anne and Michael McCarthy (eds.), *The Routledge handbook of corpus linguistics*, Oxon: Routledge, 31-38.
Skorczynska, Hanna and Alice Deignan (2006), "Readership and purpose in the choice of economic metaphors", *Metaphor and symbol* 21 (2), 87-104.
Werth, Paul (1994), "Extended metaphor- A text-world account", *Language and Literature* 3 (2), 79-103.

長尾伸一 (2002), 「機械と身体：経済学的言説におけるレトリックとメタファー」, 『経済学史学会年報　第42号』.
松村明編（1995）『大辞林』第二版, 三省堂.
山本哲士 (1983), 『消費のメタファー：男と女の政治経済学批判』, 冬樹社.

付録

表5　「**growth**」と「成長」の前で使用されたメタファー的な形容詞

メタファー的な形容詞	頻度	概念領域	概念要素
rapid	34	移動	速度
weak	31	物 生き物	力
strong	26	物 生き物	力
sustainable	21	物	耐久力
high	15	物 生き物	高さ
subdued	14	移動	速度
robust	14	生き物 建造物	力 頑丈さ
export-led	9	旅	指導
balanced	9	物 生き物	つり合い
stable	8	物 生き物	つり合い
uneven	8	物 生き物	均一性 つり合い
slow	8	移動	速度
firm	4	物 生き物	硬さ
Resilient	4	生き物 物	頑固さ 弾力
underlying	3	物 生き物	位置
sharp	3	物 生き物	鋭さ
dramatic	2	人	感情
export-driven	2	旅	乗り物
anemic	1	生き物	健康
organic	1	生き物	成分
credit-fueled	1	旅	乗り物の燃料
recovered	1	生き物	健康
oriented	1	旅	方向
tepid	1	液体	温度
feeble	1	生き物 建造物	頑丈さ
explosive	1	物	原子の状態
aggressive	1	生き物	性格
shrinking	1	物 生き物	大きさ
natural	1	生き物	成分
flat	1	物 生き物	均一性
soft	1	物 生き物	硬さ
bright	1	物 自然 色 生き物	明るさ
buoyant	1	物 生き物	浮力

メタファー的な形容詞	頻度	概念領域	概念要素
緩やか	17	移動	速度
持続的な	7	物	耐久力
緩慢な	4	移動 人	速度 態度
近い	3	物 生き物	位置
高い	3	物 生き物	位置
新たな	2	物 生き物	新しさ
堅実な	2	物 生き物	丈夫さ
好調な	2	移動 旅	調子
堅調な	2	移動 旅	調子
大きな	2	物 生き物	大きさ
戦略的な	1	戦争	戦略
健全な	1	生き物	健康
大幅な	1	物	大きさ
着実な	1	物	安定さ
著しい	1	物	明確さ
底堅い	1	物	底の頑丈さ
力強い	1	生き物	力
早い	1	移動	速度

表6　「policy」と「政策」の前で使用されたメタファー的な形容詞

メタファー的な形容詞	頻度	起点概念領域	概念要素	メタファー的な形容詞	頻度	起点概念領域	概念要素
non-cyclical	7	生き物 物	血、水の巡り 車	保護主義的な	10	人間	主義
motivated	5	生き物	感情（動機）	合理的な	3	人間	思考
restricted	5	物 生き物	縛り	緩やかな	2	物 移動	緩さ
accommodative	5	建造物 容器	広さ	新しい	1	物	新しさ
low	5	物 生き物	位置	手厚い	1	動物	手の厚さ
expansionary	5	物 生き物	膨張	賢明な	1	動物	賢さ
broad-based	4	建造物	基礎の広さ	自律的な	1	動物	自律性
aggressive	4	動物	性格	円滑な	1	物 移動	滑らかさ
structural	3	物	構成	見せしめ的な	1	動物	罰する行為
exogenous	3	容器	位置	頑健な	1	物 生き物	頑丈さ
concrete	2	物	成分	緩和的な	1	物	緩さ
deleveraging	2	物	てこの作用	建設的な	1	建造物	建設
three-pronged	1	物	三つ又				
harmonised	1	音楽 生き物 物	調和				
broad	1	物 生き物	広さ				
balanced	1	物 生き物	つり合い				
eroded	1	物	腐食				
short-sighted	1	動物	視力				
timid	1	動物	性格				
bold	1	動物	性格				
Bound	1	物 生き物	縛り				
delayed	1	旅	出発のタイミング				
loose	1	物 生き物	緩さ				
long-standing	1	生き物	立つ期間				
far-reaching	1	動物	届く範囲				
inward-looking	1	生き物	目線				
competing	1	生き物	競争				
natural	1	生き物	自然さ				
powerful	1	生き物 物	力				
open	1	容器	開閉				
thin	1	物 生き物	細さ				
vigorous	1	動物	活動力				
independent	1	動物	自由度				
contractionary	1	物 生き物	収縮				

表7　「**firm**」と「企業」の前で使用されたメタファー的な形容詞

メタファー的な形容詞	**頻度**	**起点概念領域**	**概念要素**	メタファー的な形容詞	**頻度**	**起点概念領域**	**概念要素**
large	14	物	大きさ	大	33	物	大きさ
small	12	物	大きさ	高い	20	物	位置
new	11	物	新しさ	小さい	4	物	大きさ
private	7	動物	私生活	大きい	4	物	大きさ
surviving	6	生き物	生命力	低い	3	物	位置
medium-size	4	物	大きさ	**川下**	2	自然	川の部分
heterogeneous	4	物	成分	若い	2	生き物	若さ
distressed	3	動物	感情	小さな	2	物	大きさ
troubled	2	動物	感情	強い	2	物 生き物	強さ
non-connected	2	物	繋がり	**大手**	1	動物	手の大きさ
connected	2	物	繋がり	**傘下**	1	人間 物	傘の下にいる（ある）状態
active	2	動物	積極性	活発な	1	生き物	活動力
competing	2	生き物	競争	広範な	1	物	広さ
young	2	生き物	若さ	小規模な	1	物	大きさ
dominant	2	生き物 競争	優越性	堅調な	1	移動	調子
leveraged	1	物	てこの作用	好調な	1	移動	調子
liquidity-constrained	1	液体	抑制	スマートな	1	動物	賢さ
motivated	1	動物	動機	消極的な	1	動物	性格
innovative	1	動物	思考	健全な	1	生き物	健康
competitive	1	生き物 競争	競合性	健全な	1	生き物	健康
leading	1	旅 競争	指導 優越性				
faltering	1	旅	躓き				
rival	1	生き物 競争	相手				

注）太字の項目は名詞である。

表8　「economy」と「経済」の前で使用されたメタファー的な形容詞

メタファー的な形容詞	**頻度**	**起点概念領域**	**概念要素**
real	71	物	性質
advanced	45	旅	進行
sharing	38	動物	共有
developing	17	物 生き物	開発 成長
open	13	容器	開閉
closed	9	容器	開閉
emerging	5	移動	視界に 入る様
growing	3	生き物	成長
stationary	2	移動	停止
fast-paced	1	移動	速度
overstretched	1	物 動物	伸縮
beleaguered	1	戦争	包囲される 様
service-based	1	物	基礎
market- oriented	1	旅	方向
subdued	1	移動	遅延 障害
mixed	1	物	混合
old	1	物	古さ
unstable	1	物 生き物	安定さ
thriving	1	生き物	生命力
slowing	1	移動	速度
export-driven	1	移動	乗り物の 操縦
flat	1	物	面の 均一性
resilient	1	物 生き物	弾力性 耐久性
unhealthy	1	生き物	健康

メタファー的な形容詞	**頻度**	**起点概念領域**	**概念要素**
保護主義的	12	人間	主義
実質	5	物	性質
新たな	5	物	新しさ
バブル	3	自然	泡
大きい	2	物 生き物	大きさ
対称的	2	物	対称性
急速な	2	移動	速度
バーチャル	2	物	性質
強い	1	物 生き物	強さ
長い	1	物	長さ
持続的な	1	生き物 物	耐久力
伝統的	1	物 習慣 文化	文化的 位置づけ
極端な	1	物	位置
自由な	1	動物	自由度
自給自足的な	1	人間	食生活
従属的	1	動物	行為
非対称的	1	物	対称性
連関的	1	物	繋がり
小規模	1	物	大きさ
内向きな	1	動物	目線
安定的	1	物	安定さ
堅調な	1	移動	調子
緩慢な	1	移動	速度

注）太字の項目は名詞である。